七　北条五代のころの小田原

1　秀吉をうならせた総構

一五九〇年、豊臣秀吉が率いる大軍の前に立ちはだかったのが、周囲約九kmにもおよぶ、小田原城の一番外側の守りである「総構」です。

戦国時代の小田原城は、城の周りだけでなく、城下町全体を土塁（土を盛り上げて作った城壁）で囲むという、めずらしいつくり方をしており、これが小田原城の大きな特色であると言われています。

この土塁は、東は山王川の河口から、西は早川口にいたる、東西約三km、南北約二km、周囲約二〇kmと言われていて、のちの大阪城や江戸城と並ぶくらい大きなものでした。そして、土塁には、山王口、井細田口、谷津口、早川口など一〇の城門がつくられました。

この総構があったがために、秀吉や徳川家康でも、小田原城に強引に攻めこむことはできませんでした。北条氏は、秀吉の小田原攻めに備えて、大規模な修理もお

こなっていました。

秀吉は小田原合戦のあと京に戻り、町を囲む巨大な御土居を築きますが、これは小田原の総構の影響だと言われています。

いっぽう、家康は、天下を統一したあと、小田原の総構をこわしてしまいます。それは大名がその中で立てこもって、守りを固めることをおそれたためと言われています。

小峰公園の中にある大堀切

堀の両側が土塁になっている

現在では、その一部が、小峰公園内の慰霊塔の近くや、浜町の蓮上院の横、早川口などに残っています。

二〇一二年、小田原城内（御用米曲輪跡）の発掘で、戦国時代の大きな建物と庭の遺跡が出てきました。調査から、戦国時代の小田原城で、すでに礎石（建物の基礎となる石垣）が使われていたことがわかり、話題になりました。戦国時代の小田原城の様子が少しずつわかってきています。

2　城下町の発展

北条氏は城下町を発展させるために、全国から職人や文化人をよび寄せ、大規模な都市づくりを行いました。その結果、小田原の町は東の小田原・西の山口と言われ、小田原ではやるものが「小田原様」としてすぐに全国に広まっていくほど、東国で最大の都市となりました。町の中はゴミ一つ落ちていないとまで言われるほどの清潔な都市でした。北条氏は各町の役人を通じて、月ごとに、城下町の掃除を担当させていたそうです。

北条五代のころ、今の浜町・栄町には、各地から移り住んだ鋳物師たちが住んでいました。彼らは、鍋・釜から鉄砲・大筒（大砲）まで、いろいろなものをつくりました。鎧などの製作では、甲斐の国から小田原に移り住んだ明珍家が有名です。石工

明珍家作の小田原鉢

（石材業）と紺屋（染物業）はともに、今の板橋に住んでいました。漁業は、今の本町、国府津、小八幡のあたりで行われていました。

3　文化の開花

北条早雲は学問が好きだったと言われ、歴史の本（太平記）を集めて読みくらべたり、学者に読み方を習ったりしていたと、昔の本に書かれています。京都にいるころ、早雲は武将でありながらも、有名な禅寺である大徳寺で修業をし、禅について学んでいたことも伝わっています。

氏康はその人柄を「文を表にし武を裏にす」と言われるように、文武両道にすぐれた名将でした。日頃から鎌倉幕府の歴史が書かれている「吾妻鏡」や日本初の武家のきまりを書いた「御成敗式目」をよく読んでいました。また、和歌や連歌に親しみ、当時の有名な歌人とも交流がありました。そして、足利学校（今の栃木県にある日本最古の学校）を助け、金沢文庫（横浜市）の蔵書を足利学校に寄付しました。

氏政は「小田原狩野派」とよばれるたくさんの絵師と交流があり、そのころ描かれた絵が、箱根の早雲寺のふすま絵として残っています。

このころから、小田原では、和歌や連歌も盛んに行なわれるようになりました。また、松原神社では能が盛大に行われたり、茶の湯が流行したりするなど、小田原は豊かな文化都市としても大変栄えました。北条氏は文化の面でも、今の小田原にさまざまなものを残しました。

早雲寺のふすま絵